

れる「容器」即ち、場所が余す所なく内容物でおおわれて見えなくなるまでになる状況である。しかし、「炭を灰の中にうずめる」の場合は、内容物の方が見えなくなる、表面上にあらわれなくなる状態である。「うずめる」の対象物にはこの二面性がある。

絶対に「うめる」に言い換えられない例文、「ハンカチに顔をうずめて泣く。」が、この表面に見えないような状態にする、という特徴を最もよく示していると言えよう。

(徳川宗賢・宮島達夫1972 P. 55より引用)

注(2) この意義特徴については、次の例文で「うずめる」との違いがより明確に意識される。

(63) 地面に 棒を 半分まで うめる。

(64) 地面に 棒を 半分まで うずめる。

これは、地面に棒をさし込み始め、半分まで入った段階の表現と理解される。従って、対象(物)を土のような手段で覆いつくし、対象(物)が表面から見えなくなるという点で、二語はほぼ共通の意義特徴を有している。構文(i)、構文(iii)における「うめる」「うずめる」の間でも同様の関係が認められる。

しかし、(63)が動作主の棒をさし込む行為そのものに着目した表現であると考えられるのに対し、(64)は、半分までさし込み、地中の部分が表面から見えなくなったこと、その状態に着目した表現と理解される。ここでもし、(64)の方にやや言いにくさがともなうとしたら、その原因はこのような二語の本質的意味の差によるものであって、文章語的か口語的かといったレベルの間

題ではないと見るべきであろう。

注(3) 『日本国語大辞典』では、「うずめる」の意味⑥として「(③の比喩的用法) 損失や不足を補う。」があって、これだけ見ると、(63)は言えてもよさそうである。しかし⑥の用例としてあげられているのは、(65)(66)の如き例であって、私はこれらの例をもって「うずめる」に⑥の意味をたてるのは誤りだと考える。以下の用例は「うずめる」②の「人や物で、ある場所をいっぱいにする」に入れられるべきである。

(65) 附録は文学欄で填(ウツ)めていて、記者は四五人の外に出でない。(森鷗外「青年」)

(66) 六づかしい漢文が曲がりくねりに半頁ばかりを埋(ウツ)めてる。(夏目漱石「思ひ出す事など」)

注(4) 拙稿60ページでは、「ふさぐ」の意義素を《対象物の有する空間・場所を何かで埋め、他のものの出入りする余地を残さないようにする》(下線筆者)としている。ここで私は「埋め」を「うめ」のつもりで書いている。今後、「うめる」「うずめる」との比較の際は、この意義素の設定は、「うめる」という語を使用していることから再検討されるべきであるが、ここはやはり「うずめ」ではなく「うめ」であろう。

言語経歴：1954年5月福井県武生市生まれ。
～18歳まで武生市。18歳～22歳福井県福井市。22歳～横浜市中区在住。

しずむ・もぐる

服部 貴義

1. はじめに

「しずむ」と「もぐる」は、かなりはっきりと使い分けられている。「海にしずむ」「海にもぐる」という時に、違いが感じられる。その違いはいったいどこから生じるのか。そしてそれぞれの動詞の特徴は何か。ここではこれらを明らかにしたい。

「しずむ」と「もぐる」は、この二語の比較だけではそれぞれの動詞の総括的な意味全体をつかむことは困難であり、もっと多くの語と比較検討しなければならない。たとえば、「おちる」「ひたる」「つかる」「かくれる」「こもる」「ひそむ」などとである。しかし、こ

こでは、この二語にしぼって考えることにした。

2. 分析

2.1. 主体・意志

- (1) 石が 水に しずむ。
- (2) 台風で 船が しずむ。
- (3) 潜水艦が 海中に しずむ。
- (4) 太陽が 地平線に しずむ。
- (5) 子供が おぼれて しずむ。

「しずむ」は主語に無情物をとるといえそうである。(5)は有情物を主語にしているようだが、

(6) おぼれた子供が しずむ。
という文にしてみると、子供をひとつの物体としてみているから無情物に類するものと考えてよからう。

(7) ほくは 金槌だから しずんじやう。
これも、「ほく」を金槌のような物としてみているから同様である。

いや、むしろ、無情物とするよりも、無意志的ということで統一できるといえるかもしれない。無情物は無意志だし、(5)(7)の場合は、有情物ではあるが、無意志的だと考えればよい。

- (8) 子供が 海に もぐる。
- (9) 海人が 真珠をとり 水の中に もぐった。
- (10) ペンギンが 水の中に もぐる。
- (11) 犬が 縁の下に もぐる。
- (12) 猫が こたつに もぐる。
- (13) 蛙が 土に もぐる。
- (14) 足が 泥に もぐる。
- (15) 潜水艦が 海中に もぐる。

上例により、「もぐる」は原則として有情物を主語にとるといえよう。そして、意志的である。(15)の潜水艦は、自力で海中に入ったり、出たりすることができるから、意志的であるといえそう。しかし、(14)のような例外を認めなければならない。これをどう説明したらよいか。また、

(16) 風呂に 肩まで しずむ。
という文があるが、これは、無意志的とした「しずむ」の性質に合わないようだ。これをどう考えたらよいか。
ところで、潜水艦を主語とする(3)と(15)の文をもう少し考えておこう。(3)は、事故による沈没の意味であり、(15)は、自力で海に入ることを表わしている。しかし、(3)は(15)と同じ意味にもとれる。これは、潜水艦というものの持つ特殊性に起因するのではないか。潜水艦は船の一種である。したがって、「船がしずむ」という文が表わす、事故による沈没の意味があるのは当然である。けれども、潜水艦が海中に入るのは事故によってのみではない。海中に入ることこそが、その本来の役目である。ただ、外見上は、他の船の沈没の時と同じなので、「しずむ」で表現できるのだと思う。

2.2. に格

「しずむ」も「もぐる」も、に格をとる。に格にとれる名詞を分類してみると次のようになる。

- 「しずむ」
- (ア) 水、海、川、沼、池、湖、泥、(砂、雪)
 - (イ) 海底、海中、水中

- (ウ) 水平線、地平線
- 「もぐる」
- (エ) 水、海、川、沼、池、湖、泥、砂、雪、土
- (オ) 海底、海中、水中
- (カ) 穴、すき間、こたつ、ふとん

2.2.1. (ア)(エ)の場合

「しずむ」は、に格に、流体をとるといえる。流体といっても、気体については例が見当たらない。

- (17) 足が 砂に しずむ。
- (18) 足が 雪に しずむ。
- (19)× 足が 土に しずむ。

(17)や(18)は、ふつうは言わないが、砂や雪の粒と粒との間の摩擦がたいへん小さくて、上から押すとたやすくへこんでしまう場合ならば使えるかもしれない。この時も、砂や雪の一つ一つの小さな粒が集まって全体として流体になっているとみられる。(19)の土の場合は、流体であるとは考えられず、「しずむ」は使えない。

一方、「もぐる」は、(13)の「蛙が 土に もぐる」のように、土のようなものもとる。

この二語を比べると、「しずむ」は、まわりの抵抗力が小さく感じられる。自然に下へ、抵抗なく移動できる。これは、無意志という性質とつながってくる。それに対して、「もぐる」は、まわりの抵抗力が大きく感じられる。(13)のような土の場合、その抵抗力を打ち破って入りこむには、意志的でなければならない。海にもぐる場合も、浮力に逆らって入りこむには、意志的でなければならない。抵抗の問題は意志、無意志とつながる。

ところで、今一度、(14)について触れておこう。

- (20)× 石が 水に もぐる。
- (21) 石が 泥に もぐる。
- (22) 石が 砂に もぐる。
- (23) 足が 砂に もぐる。
- (24) 足が 雪に もぐる。

(20)が言えず、(21)~(24)が言えるのは、まわりの抵抗の大小によるものだろうか。

2.2.2. (カ)の場合

- (11) 犬が 縁の下に もぐる。
- (12) 猫が こたつに もぐる。
- (25) ゴキブリが すき間に もぐる。
- (26) 私は ふとんに もぐる。

これらを見ると、「もぐる」には、何かにとり囲まれるようにして外部から隠れる状態になるという特徴が

あると思われる。そういう状態になるためには、自発的、意志的な移動が伴う。

(27) 地下に もぐって 活動をつづける。

ところが、次のように言うことは可能であろう。

(28) ダムの放水によって 今まであらわれていた岩が水に もぐった。

これは相対的な移動と言えるかもしれないが、意志的、自発的ではない。「もぐる」という動詞の持つ意味のいくつかの側面のうち、隠れた状態になるという性質が注目され、その他の側面、つまり、意志的であるという特徴が弱くなってしまったと考えるのは無理であろうか。(14)「足が 泥に もぐる」の問題の解決の糸口はこの辺にあると思われる。しかし、動詞「かくれる」の分析やそれとの比較検討を行っていないので、この点については今後の課題として残す。

2.2.3. (イ)(ウ)の場合

「しずむ」は、重力にしたがった、流体表面から基底面までの移動である。ただ、に格に、底、中のどちらをとるかによって、その移動のどこに注目されるかが違って来る。底にしずむという場合、到達点は底だが、起点は、表面でも、流体中のある一点でもよい。中にしずむという場合は、起点は表面であり、そこから流体中に入りこめばよいわけで、底に到達するかどうかは意識されない。

ここで、再び(ウ)を考える。海、川、水などにしずむという時、まず、起点としては表面でなければならぬが、底に到達するところまで意味するかしないかは、場面によって異なるであろう。たとえば、

(29) 船が 海に しずむ。

は、海面から、海中へと姿を消してしまい見えなくなったことだけをとらえて表現する場合と、海底に着くまで移動していったことを意識して表現する場合があるであろう。前の場合、「しずんだ」という完了表現は、船が、海面を境にして外部から内部へと消えてしまったときなされるが、後の場合は、底に着いてはじめてなされる。

前の場合をもう少し考えてみよう。物体は立体的であり、厚みがあるから、一部が流体表面と接触していても、上の部分は外に出ている。下への移動により、流体表面を境にして、外部から内部へ消えるということは、物体の最上部が、液体表面下に入ったということである。

これから(ウ)の場合も説明できよう。

(30) 太陽が 水平線に しずむ。

この文では、太陽の一部が水平線に触れた時にしずみ始め、太陽の一番上の部分が水平線から消えた時、しずんだという。

(31) 太陽が 海に しずむ。

(32) 太陽が 山に しずむ。

(4) 太陽が 地平線に しずむ。

(32)(4)が言えるのは、山と空との境界線、陸と空との境界線を、流体と外部との境界である表面と同じように考えたからであろう。

さて、「もぐる」の方はどうであろうか。

(33) 少年が 川底に もぐる。

のように、川底、海底などに到達点が示されていれば、表面から底まで移動することになる。しかし、

(34) 少年が 海に もぐる。

といった場合は、海面から少年の姿がみえなくなればよいのであって、中に入れば自由に動いてよい。底まで至るという意識はない。

範囲を広げて、(ウ)についても考えてみる。縁の下、こたつ、穴、ふとんにもぐる場合に、たとえ境界がはっきりした線や面として存在しなくても、外部と内部を分ける境があるはずで、それを越えて内部に入りこむことを、「もぐる」は表わすのである。内部での動きは自由である。

2.3. 方向

今までみてきたように、「しずむ」は、もっぱら重力にしたがった下方への動きである。「しずむ」には、次のような例がある。

(35) 冷たい空気が 下に しずむ。

(36) 地盤が しずむ。

(37) ノックアウトされて マットに しずむ。

さらに、文学にあらわれた例として、次のものがある。

(38) と、私の傍に立って、それを避けたはずのまづ子の体が、力なく折れるように沈み、地面に折り重なって口から何か吐いていた。

(阿部知二、『冬の宿』)

これらの文は、「しずむ」の下方への移動性から生まれた表現であろう。

それでは、「もぐる」はどうであろうか。海にもぐるという場合、たしかに下向きということはできても真下とは限らない。もっと自由である。さらに、縁の下、こたつ、ふとんなどにもぐる場合を考えてみれば、「もぐる」には方向の制限が無いといえる。

2.4. 一時的・永久的

(39) アトランティス大陸が 大西洋の海底に しずんだ。

(40) 村が ダムの底に しずんだ。

「しずむ」は、永久的、あるいは、かなり長い時間であるということが一般的に言えよう。それに対して、「もぐる」は一時的であると言えよう。この問題も、意志、無意志と関連する。「しずむ」は無意志的であった。自力で浮かぶ能力の無いものが主語となるのだから、永久に底にあるということになろう。「もぐる」は意志的であった。自発的に中に入ったのだから、再び自発的に出てくる可能性が強く、一時的であると言える。

2.5. 派生的用法

精神的マイナス面である、暗い、悲しい気持ちを表わすのに「しずむ」が用いられる例がある。

(41) 涙に しずむ。

(42) 悲しみに しずむ。

(43) 物思いに しずむ。

また、

(44) 不運に しずむ。

は、よくない状態に落ちこむことである。

3. おわりに

これまでの考察から言えることは、「しずむ」は、重力にしたがった流体表面から基底面までの移動が、意義特徴の中心的なものになっており、一方の「もぐる」は、まわりのものに取り囲まれるようにして外部から隠れた状態になることが、中心的なものになっていることである。そして、「もぐる」が、に格に、水、川、海などをとった時に、「しずむ」との類義性が生まれる。その時、二語の違いは、主体の意志の有無で説明できる場合が多かったが、例外もあった。いくつかの観点から分析してみたが、まだまだ残された問題は多い。

言語経歴：1957年4月東京都武蔵野市に生まれ現在に至る。

はぐ・はがす・むく

坂 東 多衣子

1. はじめに

国立国語研究所1964によると、「はぐ・はがす・むく」は「破壊、切断など」に、「はぐ・むく」は「包摂」の項目にわかれて収められている。ここで、これらの語をとりあげたのは、これらの語の使用に関して共通語と私の使用言語（高知）とのずれに気づいたためである。私の場合、「むく」という語は使用語の中ではほとんど稀な語であり、「ひざをすりむく」というような複合語の場合と、「目をむく」という慣用的な表現にしか使わない。ここではまず、私の内省により私の言語での「はぐ・はがす」の二語を分析してから、共通語の「はぐ・はがす・むく」の三語との比較分析を行なうことにする。方法としては、これらの語の使用例文をあげ、考察してゆくことにする。

2. 高知県高岡郡佐川町方言における「はぐ・はがす」

(以下、佐川町方言と略称する。)

2.1. 対象物

(1) 木の皮を はぐ。

(2) 木の皮を はがす。

(3) エビの殻を はぐ。

(4) エビの殻を はがす。

(5) 指の皮を はぐ。

(6) 指の皮を はがす。

(7) 爪を はぐ。

(8) 爪を はがす。

(9) 布団を はぐ。

(10) 布団を はがす。

(11) 瓦を はぐ。

(12) 瓦を はがす。

(13) 包み紙を はぐ。

(14) 包み紙を はがす。

(15) サロンパスを はぐ。

(16) サロンパスを はがす。

(17) 切手を はぐ。

(18) 切手を はがす。

(19) 障子紙を はぐ。

(20) 障子紙を はがす。

(21) りんごの皮を はぐ。

(22)^x りんごの皮を はがす。